

EurekaIX

六年制通信 No.4 令和3年5月7日(金)号

劣等感の克服

久しぶりに『オイディプス王』を読みました。ソポクレス作、ギリシア悲劇の最高傑作と言われるこの作品には多くの翻訳があるのですが、今回私は岩波の全集で読みました。岡道男の訳ですが、この方に間違いのあろうはずがないので安心です。注釈も詳しく大変勉強になりました。主人公の名前の「オイディ」の部分は「腫れた」、「プス」は（本当は「プース」という発音ですが）「足」という意味です。現代英語のペダル *pedal* や歩行者 *pedestrian* の *ped* はこの「足」から来ています。ギリシア悲劇は神託（予言）の実現を避けようとしてする行為が結果としてその実現を招いてしまう場合が多く、これが一つのモチーフとなっており、のちの小説家や劇作家にも影響を与えたはずです。

テーバイの王ライオスと妻のイオカステの間に男の子が生まれる。ところが神託は「その子は父を殺し母を妻とする」と告げたので、王は部下に子の殺害を命じる。赤ん坊を憐れんだ部下は殺さずに山に捨てる。足が腫れたのは踵にブローチを刺されたため。あとは読んでごらんください。岩波文庫にあります。

このオイディプスからエディプス・コンプレックスという心理学用語が生まれたのですが、これは男子が母親を異性として愛し、意識下において父親に嫉妬し憎しみの感情を持つことを言います。この反対がエレクトラ・コンプレックスで、娘が父親を愛し母親を敵視するわけですね。エレクトラの父はミュケーナイの王で、トロイア戦争の時のギリシア側の総大将です。エレクトラは父親のことが好きだった的呢。女子の皆さん、ひょっとして小さい頃「大きくなったらパパのお嫁ちゃんになる」とか言いませんでしたか。そして、パパは異常に喜びませんでしたか。で、今、冷たくしていませんか。女子の皆さん、父親には優しくするんですよ。

いや、こんな話をするつもりはなかったのです。コンプレックスという言葉が最近劣等感と同義語のように使われているのが気になっていたのです。コンプレックスは基本的には意識下にあるもので、本人も気づいていない場合が多いわけです。エディプス・コンプレックスも、おそらく医者に指摘されたとしても自分ではそうではないと考えているはずですよ。

劣等感は違いますね。明らかに自覚しています。自分が劣等感を持っていると。はっきり意識しています。人はどうしても他人と比べてしまいます。他人どころか人間は、選ばなかったもう一つの人生に嫉妬しながら生きていると言われるように、もう一つの自分を仮定して、それと比べたりもします。私がよく昨日の自分と今日の自分

今日の自分と明日の自分、それだけを考えなさいというのは、このことが困難だと思っているからです。それに他人と比べるのがいかに危険か、昔の落語の名人は「あいつは下手だと思ったら自分と同じくらい、同じくらいの力量だと思ったらかなり上、自分より上だと思ったらはるかに上だと思え」と言っています。これは、つまり他人と比べるときには、自分の力量を正確に判断できないものだということです。

それに、私たちは実は狭い範囲で他人と比べていますね。君たちの場合、比べる対象はほとんどが同級生ではありませんか。それもこの六年制に在籍している仲間ですよ、比べてしまうのは。考えてみると本当に狭い範囲で劣等感を持ったり、嫉妬したり、嫉妬している自分に傷ついたりしているのですね。愚かなことです。

では、劣等感はどうのように克服すればいいのでしょうか。私は二つの方法があると思っています。一つは君たちにはちょっと難しい、というかチャンスがないかもしれない。しかしこれが最も簡単な方法です。それは自分が勉強したいと思った分野で、この人には今後何十年頑張ったところで追いつけるはずがない、といった人物に会うことです。いっぺんに嫉妬心は吹き飛び、劣等感もなくなり、ひたすら謙虚になれます。追いつけないのだけれど少しでも近づこうと努力はできます。そこに他人の存在は必要ありません。したがって、劣等感もありません。

もう一つは、うちの四大綱にある通り、ベストを尽くすことです。劣等感、その裏で、自分は本気を出していない、自分もやればできるという「過剰な自意識」を生み、それでどうにか心の均衡を保とうとするのですね、人間て。でも、本当に正しく自分の能力を知れば、正しく他人の能力を認めることができます。そうすると劣等感ではなく敬意が生まれます。そして他人の評価も気にならなくなります。自分は本当に本気を出せる人間なのか、自分の能力はどの程度のものなのか、知るのを怖がらないでほしいと思います。ベストを尽くすと、本当の自分と向き合うことになりますから、それはちょっと怖いのですね。でも恐れてはいけません。本当の自分を知らなければいけません。頑張りましょうね。

今週のおすすめ

・東野圭吾 『白鳥とコウモリ』 (幻冬舎)

東野さん級になると文章にもストーリーにも破綻はないし、安心して読めますね。読者の望むようなひねりもあるし、ちゃんと色んな疑問に答えるエンディングが用意されているし。評判のいい弁護士が殺される。着信履歴から容疑者が浮かぶ。防犯カメラにも写っている。そして容疑者は「すべて私がやりました」と。ところが容疑者の息子と被害者の娘は違和感を覚え、真相を探る。被害者の娘は「あなたの父親は嘘をついています」と言い、加害者の息子は「私の父はそんな人間じゃない」と信じる。さて 30 年前に起こった事件が今回の事件と関係があるらしいのだが、警察はもう捜査をしてくれない。自分たちで真相を暴く以外になくなった二人は協力するが、辿り着いた真実に言葉を失う。白鳥とコウモリ、一体どちらが白鳥でどちらがコウモリだったのだろう。どうです？ 読みたくなるでしょ。

BGM は 柴咲コウ の 影 でした…。